

放射線災害・医科学研究拠点 第4回国際シンポジウムを開催

平成 28 (2016) 年 4 月に広島大学・長崎大学・福島県立医科大学の 3 つの大学によるネットワーク型共同利用・共同研究拠点として設置されました「放射線災害・医科学研究拠点」の第 4 回国際シンポジウム「How can we communicate possible health effects in radiological emergency? (放射線緊急時において生じ得る健康影響についてどう伝えるか?)」を、令和 2 (2020) 年 2 月 12 日に広島大学広仁会館において開催しました。

本シンポジウムは、上記 3 大学で連携した研究の推進を図るとともに、それによって得られた最新の研究成果を国内外に発信することを狙いとして企画されたもので、現在関連の研究分野を牽引している新進気鋭の先生方をお招きしてご講演頂くと共に、放射線や関連諸科学に関わる分野の第一線で活躍されている研究者による最新の研究成果に関する発表等を行いました。その狙いどおり、本シンポジウムでは、137 名の参加者を迎えて、終始活発な情報・意見交換が行われました。

オープニング

最初に広島大学の越智光夫学長より開会の挨拶があり、講演者を含む全ての来場者への歓迎の辞が述べられました。



セッション 1 「放射線障害医療：放射線障害からの回復に関する科学的基礎」(座長：長崎大・鈴木啓司、広島大・岡田守人)

本セッションでは、まず米国・コロンビア大学の Tom K. Hei 教授から「The Role of Biomarkers in Radiation Disaster Management」と題した講

演が行われました。様々な biodosimetry marker について解説され、特に放射線によるミトコンドリア傷害のシグナル解析の有用性に関する最新の研究成果について報告がありました。



福島県のふたば医療センターの谷川攻一センター長からは「Roles of critical care medicine in radiological emergencies –Advances and challenges for acute radiation syndrome–」と題した講演があり、ARS に対するさらなる集中治療体制整備充実の重要性を指摘されました。

東京大学大学院医学系研究科の宮川清教授からは「Radiological risk communication of germline variants incidentally detected by cancer precision medicine」と題した講演がありました。Precision medicine の時代に何をすべきか、がん遺伝子パネルの紹介とエキスパートパネルの活用には多分野の専門家の協働を要することが報告されました。

セッション 2 「低線量放射線被ばくと健康リスク研究：放射線誘発がんの臨床的側面」(座長：福島医大・村上道夫、長崎大・光武範吏)

本セッションでは、まず福島県立医科大学医学部の大津留晶教授から「Methods for conducting disease monitoring in low-dose exposure condition as a counter-measures during a nuclear disaster」と題した講演がありました。交絡因子を除外した健康影響における調査介入について紹介のあと、特に福島の甲状腺超音波スクリーニングに関して現状と課題について解説されました。

広島大学原爆放射線医科学研究所の角舎学行

講師（代読：恵美純子先生）からは「Radiation effects and risk of breast cancer」と題した講演がありました。乳がんの臨床症状やそのリスクについての概説とともに、日本におけるがんの診断のためのX線被ばくの現状について報告されました。

長崎大学原爆後障害医療研究所の中島正洋教授からは「Detection of radiation-induced late effects in precancerous tissues from human skins and rat thyroid glands」と題した講演がありました。放射線によるDNAダメージ反応についての詳細な解説とともに、特に53BP1（p53-binding protein 1）に関する最新の研究成果が報告されました。

セッション3「社会への影響と放射線防護：健康リスクに関する効果的なマスコミュニケーション」（座長：広島大・吉永信治、福島医大・長谷川有史）

本セッションでは、まず米国・Northwestern大学のBradley Hamm教授から「Informing and Educating the World on Deadline: The Case for World-Class Communications」と題した講演が行われました。JournalistとExpertの関心はしばしば異なること、正確な科学的知識を一方的に伝えるだけでなく様々なメディアを駆使して双方向のコミュニケーションによって理解を深める必要性について分かり易く説明がされました。



続いて、東京慈恵会医科大学の越智小枝講師から「Science communication in Fukushima - understanding non-scientific rationality」と題した講演がありました。福島第一原発事故における実際の経験に基づいて、科学だけにに基づくコミュ

ニケーションの難しさが印象深く説明されました。

世界保健機関（WHO）のZhanat Carr博士からは「Framework for Management of Psychological and Mental Health Impact of Nuclear Emergencies」と題した講演がありました。原子力事故時における心理・精神的な影響に対処するためのWHOの考え方と取組みが紹介されました。



基調講演（座長：広島大・保田浩志）

本シンポジウムのテーマに沿って、元国連科学委員会事務局長のMalcolm Crick氏による「The importance of trustworthy sources of scientific information in risk communication with the public」と題した基調講演が行われました。国連機関の職員としてチェルノブイリ事故や福島第一原発事故での対応にあたった経験に基づき、科学に基づくコミュニケーションを効果的に行うには、準備・思いやり・真実・簡潔さ・十分な練習が必要であることなどが指摘されました。



ポスターセッション

本シンポジウムでは、上記の招待講演に加えて、全国の大学・研究機関等から40件を超すポスター発表が行われ、セッション中はそれぞれのポスターの前で終始活発な議論が展開されました。いずれも質の高い発表でしたが、より多くの来場者の関心を集めた今野伸樹さん（広島大学）、富岡啓太さん（広島大学）および黒濱大和さん（長崎大学）の3名に若手優秀ポスター賞が授与されました。

歓迎レセプション

会議終了後の夕刻に開かれた歓迎レセプションは、広島大学の田代原医研所長からの挨拶で始まり、大学院生から著名な専門家まで80名近い方が一同に会して親睦を深めました。途中には、外国からお越しいただいた招待講演者の方々から、3大学の連携がさらに深まり研究が発展することを願うこと、その発展にこれからも協力していきたいという主旨のスピーチを頂きました。最後に福島県立医科大学の齋藤清副理事長兼ふくしま国際医療科学センター長から、本シンポジウムに参加・協力された方々への感謝とともに、広島大・長崎大・福島医大の強い協力関係を基盤としたネットワーク型研究拠点のさらなる発展を祈念する主旨のメッセージを頂きました。

さいごに

本シンポジウムは、国内外で新型コロナウイルスの感染拡大が懸念され始めた時期で、会議の直前まで予定通り開催できるか心配でしたが、招へいしていた外国人講演者の方々全員にお越しいただき、盛況のうちにつつがなく執り行うことができ、本シンポジウムの企画に関わった者として胸をなでおろしています。この場をお借りしまして、関係者の皆様の多大なるご協力とご尽力に心からの謝意を表します。

次回（第5回）の国際シンポジウムは2021年2月8日に長崎大学を当番校として開催される予定です。

（文責：保田浩志、廣橋伸之）

